

リコー三愛グループ

三愛会会誌

1997 No.119

特集 ストレスを克服する

あなたに合ったリラックス法で
心も体も健やかに



リコー 桜井社長インタビュー:「ジェントルマンのユーモアを身につけたい」
Fashion Trend: 97年夏、ロング・パレオを街着感覚で楽しむ



「やあ、いらっしやい」。

桜井社長は、よく響くバリトンで私たちが迎えてくださいました。デスクの上に置かれたノート型パソコンで、ちょうど今日の予定のチェックを終えられたところのようでした。

昨年4月1日、浜田前社長（現会長）からバトンタッチを受け、社長に就任されて1年。21世紀へ向かって、リコーの“今”をリードされる桜井社長にお話をうかがいました。

■ インタビュアー ■

みやざわ しんじ
宮澤 信二（北九州コカ・コーラボトリング）
くろやなぎ やよい
畔柳 弥生（リコーエレメックス）

21世紀は「イメージコミュニケーション」の時代

「情報富民化」のお手伝い

ジコミュニケーション」についてお話ししましょう。

宮澤 リコーの社長に就任なさって一年がたちました。「社長初年度」についてご感想をお聞かせください。

社長 一年目は「レールに乗って、高速で突っ走ってきた」というのが実感ですね。社長の仕事はとても範囲が広い。あらゆる商品分野、国内・海外、研究開発、販売、財務や人事など、全ての業務に関わりを持つわけです。全体を見回しているうちに、あつという間に過ぎました。

そんな中でも、社長としての私の考え方は、ある程度発信してこられたように思っています。

畔柳 コーポレートスローガンとして掲げられた「イメージコミュニケーション」や、「フアイヤー文化」などでしょうか。

社長 ええ、そうです。それじゃ、まず「イメー

情報のデジタル化、ネットワーク化が急速に進む中で、今「情報富民・情報貧民」という現象が起こりつつあります。仕事でも個人の生活でも、ネットワークで良質な情報を早く豊富に得られる人とそうでない人のことです。そこで、できるだけ多くの皆さんが「情報富民」になるお手伝い

桜井正光(さくらい・まさみつ) 社長 プロフィール

生年月日 1942年1月8日
 出身地 東京都墨田区
 趣味 名所旧跡探訪、ゴルフ、読書、デッサン
 愛読書 司馬遼太郎の作品
 座右の銘 これすなわち道場なり（「法華経」の一節）
 略歴 1966年3月 早稲田大学第一理工学部工業経営学科卒業
 1966年4月 リコーに入社
 1984年5月 RICOH UK PRODUCTS LTD. 社長
 1992年6月 リコー 取締役、資材本部長
 1993年4月 RICOH EUROPE B.V. 社長
 1994年6月 リコー 常務取締役
 1995年1月 帰国して、リコー 研究開発本部長
 1996年4月 リコー 第5代社長に就任、現在に至る

いをする事が、私たちの事業の使命だと考えています。

今までの複写機やファクスなどのOA機器は、主に画像や文字といった、人間が目で見えて分かる「イメージ情報」を扱ってきました。一方コンピュータの情報は、機械の言葉で書かれた「コード情報」です。

今オフィスでは、イメージ情報とコード情報が分離し、入り乱れて存在していますね。今後は、OA機器とネットワーク化されたコンピュータを融合し、人間が扱いやすいイメージ情報を介してコード情報も統合的に活用できるようになることが求められているんです。それによって人と人のよりよいコミュニケーションを実現し、仕事もしやすく生活も豊かになる。これが「イメージコミュニケーション」の考え方です。

ニユアルなんか見なくても使える高性能の「アプライアンス」。設置も操作もメンテナンスも簡単で、バージョンアップ等による性能向上も容易にできる、扱いやすい情報機器。これをコンセプトに物づくりを進めていきたいと思っています。

まずやってみる

これが「ファイヤー文化」

宮澤 「ファイヤー文化」とは「火をつける」ということですか。

社長 そういう意味もありますが、私は「撃つ、引き金を引く」という意味で使っています。

ハンティングに例えれば、お客様のニーズ、つまり的が分かっていた時代には「構え、狙え、撃て」というやり方が可能でした。ところが今は、どこに向かって構えるべきかが分からない。だから、撃つてみてはじめて見えてくるニーズに狙いを定め、それから構えて事業化しようというのが「ファイヤー」です。

私は、こういうやり方をリコーの組織や社員に共通する価値観、行動

のパターン、つまり「文化」として根付かせたい。そう考えて「ファイヤー文化」と言っているんです。

リコーが二十一世紀の情報産業の勝者になるためには、イメージコミュニケーションを具体化する必要があり、そのためにはファイヤー文化を確立しなければなりません。

「イメージコミュニケーション」「ファイヤー文化」「二十一世紀の勝者」。私は、この三つを軸に、これからのリコーが進むべき方向性を、より明確にしていこう、と考えています。

充電できたイギリス生活

畔柳 社長はヨーロッパでの生活も長かったようですが、社長に就任されて、ご自身の生活はかなりお変わりになりましたか。

社長 自分の時間が少なくなったのは事実ですね。

海外に赴任すると、仕事の面でも生活の面でも齟齬になることがあります。ほうっておくとノイローゼになってしまうですが、多くは体だけが海

外に行って心が日本に残っている場合にそうなってしまいます。辛いことがあったとき「日本だったら上司とか親兄弟が助けてくれるのに……」といった具合ですね。でも、そこには優しい上司や親はいないんです。そこで「日本だったら……」から「ヨーロッパだったら……」に意識を変える必要があります。

こう考えると、日本ではできないいろいろなことが見えてきます。日本では手に入りにくいイギリス製品は身近にあるし、ヨーロッパの歴史の遺産や風景にじかに接することだってできる。英語を勉強したければ周りが学校です。ギリシャのアクロポリスの丘が見たい、イギリスの陶器を集めてみたい……と思ったら、お金を借りても、積極的に実行することにしたんです。

私は、日本から赴任してくる人たちにもこういう考え方を勧めました。こうやって暮らすと海外生活のプレッシャーなど何でもありません。それどころか、日本へ帰国することになってもまだまだやる事があって、帰りがたがらない家族も多く、最

近はリコーに限らず、日本への「逆単身赴任」つという現象もあるようですよ。

宮澤 社長は歴史探訪がお好きかどうかがつておりますが、ヨーロッパではどんなところをお訪ねになりましたか。

社長 いろんなところに行きましたよ。私はお城が好きでね。堀の作り方、石垣の形など、それぞれに意味がある。武器が変われば、そして戦い方が変われば城の造りも変わるし、また一方、近世の住むための城は大変きらびやかです。フランスのベルサイユ宮殿、オーストリアのノイシュバンシュタイン城などは非常に美しいですね。

イギリス時代には、プライベートな時間の中で本当にいろいろなことを学び、充電しましたねえ。

宮澤 社長は法華経の中の「これすなわち道場なり」という言葉を座右の銘にしておられるそうですが、それと重なりあうように思えます。

社長 仕事でもプライベートでも、与えられた環境で精一杯やることによって吸収できることは多いし、飛



宮澤さん

躍のチャンスにもなると思うんです。外国に住んで仕事をすると、その国の人の発想や生き方の背景にあるものと深く関わらざるを得ない。そういう中で、その国の文化や歴史などを自分の興味に従って勉強する。若い人にもそういう経験をどんどんさせたいし、またしてほしいですね。

徹底して働き、徹底して遊ぶ

畔柳 司馬遼太郎がお好きだそうですが、国の興亡などを描く歴史小説は、経営者の哲学に通じる部分もあるとお考えですか。

社長 結びつくと思えますし、学ぶべき点もあると思います。でも私は、あまりそういうふうには結びつけない。経営者だからといって、経

営という角度から共感できるものしか学ばない、手を付けられないようにになると、もの見方が狭くなります。小説や歴史、広く言えば趣味の世界は「経営者として」ではなく「人間として」楽しみたいですね。

ヨーロッパの貴族の偉さは何かというところ、一つは国のリーダーとしての強い気概を持っていて、いつも国民の先頭に立つという点です。でももう一方では、非生産的(?)

なことも非常に熱心にやることでごく少数の人だけが使っている言葉を懸命に勉強したり、およそ役に立たない、煮ても焼いても食えないような生物の研究に没頭する(笑)。お金にもならず、効率からはかけ離れたことを真剣にやる。両方を深く深く追求する。これこそ貴族の存在価値だと考えているわけです。

畔柳 両極端に見えますが……

社長 両方のバランスが大切なんです。ヨーロッパの経営者たちは、仕事をするときには二十四時間体制で日本人以上に働きます。しかし遊ぶときは、一、二カ月全く仕事から離れて、徹底して遊ぶ。それで balan

スが取れるんです。

この一年、仕事はとても充実していましたが、自分の時間はあまり取れませんでした。今後は、社長の私がやるべき仕事とみんなに任せるべき仕事を区別して、自分の時間を増やし、充電する余裕を作り出したいですね。

ジエントルマンのヒーヒー

社長 もう一つイギリスに学びたい点はユーモアのセンスです。

リコーUKプロダクツがあるアイアンブリッジは、一七七八年、世界で最初に鉄の橋を作った産業革命発祥の地です。ある日、地元の開発公社の方が「実はアイアンブリッジだけじゃなくて、ここには世界初のコンクリートブリッジもあるんです」というんです。私は一生懸念探し回りましたが、どうしても見つかりませんでした。でもそれは、実はジョークだったんです。他の人たちも涼しい顔で「それは初耳だ」とか「見つけたら私にも教えてくれ」なんて言うわけで、みごとに担がれました(笑)。



彼らは、まじめな話にも自然にユーモアを交えられないようでは、ジェントルマン失格だと思っ
ています。ジョークで相手の気持ちを開かせ、相手の意思を笑いと
いう形で確かめながら、自分の言いたいことをスパッと言う。ユー
モアが双方向的なコミュニケーションを成立させるんです。私自身も
含めて多くの日本人は言いたいことの押し売りをしがちですが、
ユーモアのセンスは、ぜひ学びたいですね。

二十一世紀への夢

宮澤 西暦二〇〇〇年も目前ですが、二十一世紀の社会についてのお考え

や夢をお聞かせください。
社長 二十一世紀は、確実にデジタル化・ネットワーク化の進展によつて、生活も仕事も今とは格段に違つた、楽しく、豊かな、便利なものになつてゆくでしょう。

日本の光ファイバー網を二〇〇五年までに整備するNTTの「ファイバー・トゥー・ザ・ホーム」計画、千個近くの通信衛星を静止軌道に打ち上げて、地球全体をカバーする通信網を作るアメリカの計画。こうしたインフラが整うと、いつでもどこでも瞬時に、映像情報でも文字情報でも受けることができ、また発信することもできるようになります。

仕事を例にとると、今までのように大変な時間と労力をかけて会社に毎日来る必要はなくなるでしょう。



畔柳さん

いわゆる在宅勤務とかサテライトオフィスの利用とかが、二十一世紀にはもっと普通のことになっていくでしょうね。個人的には、家族と一緒に環境では仕事はできないし、したくもありませんがね(笑)。

また家庭とかサテライトとかいう特定の場所ばかりか、不特定のあらゆる場所がオフィスにもなつていくでしょうね。英語ではユビキタス・オフィスと呼んでいますが、現在のコンピュータやOA機器が、もっと小型化し、使いやすくネットワークにつながりやすくなつてくると、もう本当にそこらがオフィスになつてしまいます。サラリーマンにとつては、大変便利になる一方、いつでもどこでも仕事に追い回されるいやな世の中にもなりますね(笑)。

もつともつと高機能化して、もつともつと使いにくいが大変な仕事をすめるものになる。一方、少々機能は限定されているが、とっても使いやすいものが出てくるでしょう。それはたぶん、今のコンピュータのような顔・形はしていないはずで、OA機器も全く同じことが言えると思います。

畔柳 物づくりと地球環境のことについてお聞かせください。

社長 私たちは、生産者だとか消費者だとかいうのではなく、皆同じ地球の住人として、地球環境にこれ以上の負荷をかけないように、最大の努力を払っていかねければなりません。今地球は、瀕死の重傷を負っています。このままでは二十一世紀の半ばには破局を迎えます。豊かな社会を実現するためにも、これからわれわれ一人ひとりが、もつともつと地球を大切にする行動をとっていかねばならないと、強く感じています。

宮澤 未来への展望をもつと聞かせていただきたいのですが、時間がなくなつてしまいました。今日は、本当にありがとうございました。